

共創の学会を期待して

(’84年6月～’88年6月 学会大会14回～17回)

第3代理事長 高橋和敏

共創とは、石川光男先生（ICU教授）の言葉を借用した。すなわち従来までの社会における「競争」パラダイムから、これからは「共創」への転換が必要であるという先生の説に、大いに共鳴するところを感じたからである。

さて、私が学会の理事長職をお受けしたのは、1984年6月であった。それから4年の間職責を果たすのに精一杯であったというのが実感である。1988年6月、一学会員として学会の発展に協力することをお約束し、その後は役職につかなかった。それは、学会の役職にあまり長く携わることは、却って学会の現実を見失うことになりかねないという個人的な懸念があったからである。

ともあれ、学会の運営には会長をはじめ役員の方々の力量によることも大きい、むしろ事務局が重要な役割を果たすものと、現在でも思っている。私の在任中には、幸にも上智大学の師岡先生をはじめ事務局の方々の努力があった。その後、東海大学社会体育研究室に移転し、大学自体の協力も得られた。その点、私は事務局に恵まれ、事務局員の献身的な努力に支えられたことを心から感謝しているところである。

ひるがえってみると、本学会発足当初の学会ニュース（No.2, 1971年6月）に、会員発言として「学会活動への期待」を投稿させて頂いたことがある。その要旨は、4点あった。すなわち ①人間そのものの追求であり、人間不在の学会にはなりたくない ②学会は優れた研究者もいればこれから研究を志す人もいる。したがってこれらの人達の連帯と励まし合いによって学会が成り立つもので在りたい ③学会自体が学会員に対してサービス精神が旺盛であるとともに、学会員の能動的な働き掛けが不可欠であるという認識をもちたい ④学会やそこのレクリエーション研究は、運動体や実践活動と有機的な繋がりをもつ必要がある……ということであった。

学会設立14年目に理事長となり、学会ニュース（No.31, 1985年1月）に「現場を志向した研究を」をテーマにご挨拶をした。その中では、①本学会が、さまざまな分野の専門家の集まりであり学際的である特徴を十分生かし、相互の協力と理解のもとに、学会活動を推進したい ②レジャー・レクリエーションの問題は、常に現場の実践が伴う。その研究も当然その線上に在るべきであろう。しかし基礎研究などは、直接現場につながらないこともあり得るが、人間の幸福とレクリエーション運動の発展を志向し、フィードバックさせるような研究活動の展開が望まれる……という趣旨を記して挨拶に替えた。

これらの願いが、どの程度かなったかは、ほんとうのところ分からない。しかし、その願いは現在でも変わっていない。一般的にみて学会は往々にしてボスを生み出しやすい。しかし学会活動はヨコの連帯が基本である。それが活発であればある程、活性化されるものと思われる。とくに研究活動については、いわゆるシニア研究者は質の高い研究を目指すと同時に、相互協力によってより高いものを求め、さらに将来を担うジュニア研究者を励まし、その育成に力を注ぐべきものとする。また、レジャー・レクリエーションの研究分野でも最近とくに「So what?」が厳しく求められる時代となってきた。この問いに応えるには、本学会員一人一人が、共に創りあげる意識をもちながら、それに基づいた研究活動を、地道に続けることが極めて重要なのであろう。期待して稿を終えたい。